

### 3) 風環境の把握

風向・風速の空間分布を把握するために(財)日本気象協会の気象モデルデータベース(全国風況マップ)を整理した。これは、2000年7月8月の代表的な10日間の気圧配置と気象官署における観測結果を基に算出された1kmメッシュデータである。整理高さは都市の建物高さ等を考慮し、地上50mとした。

関東地方は南風が主であり、埼玉県中部以北でやや西よりに傾いている。風速は沿岸部が強く、内陸に行くに従って弱風化する傾向がある。また、風速は18時が最も大きくなっている。

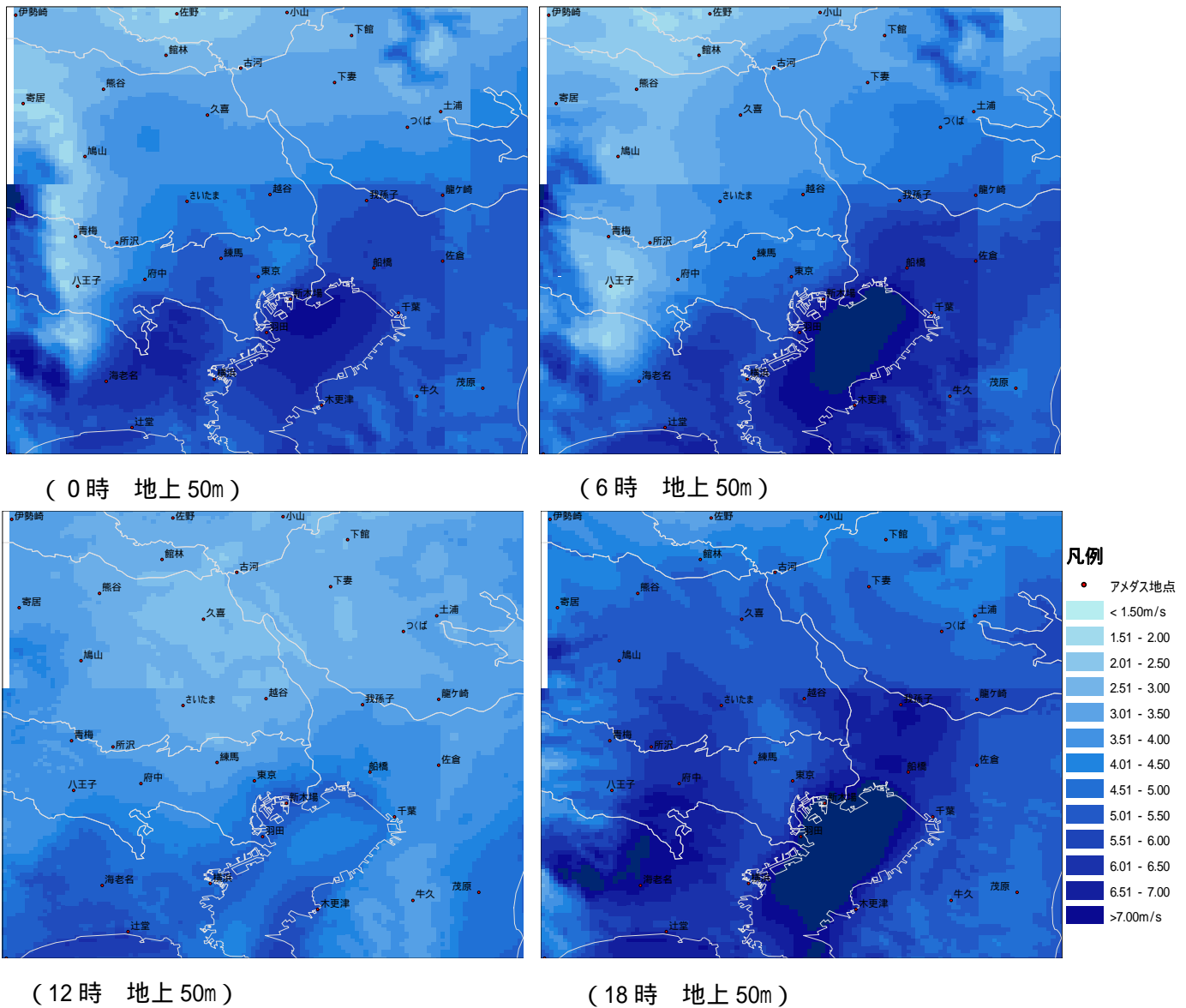
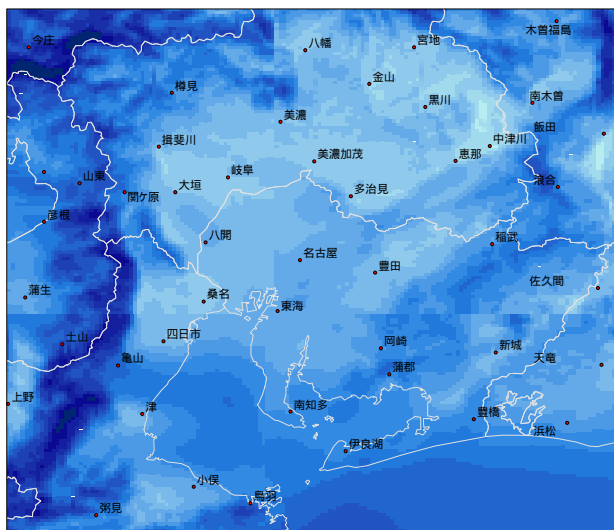
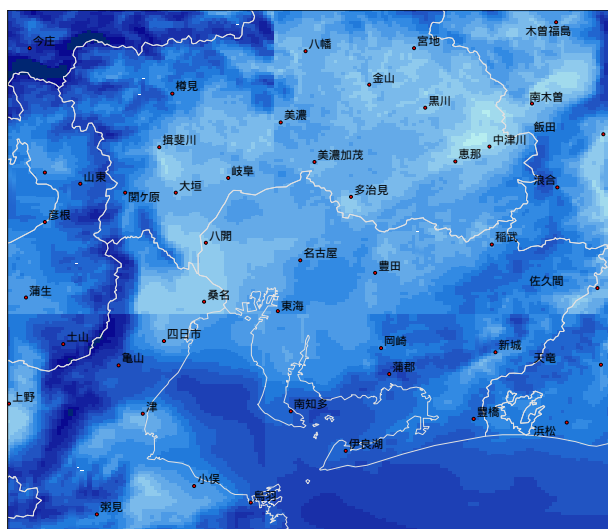


図2 - 20(1) 関東地方の風向・風速分布

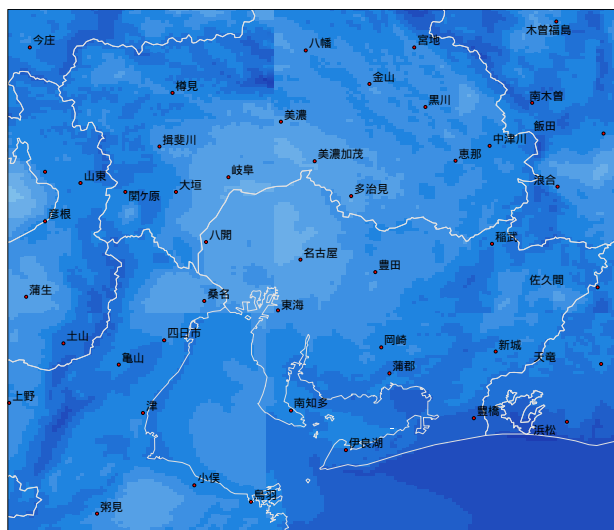
中部地方は、流入する南風が山地の影響を受け、様々な風向へ変化している。風速は湾岸部と山地部で比較的強くなっているが、岐阜市、多治見市など濃尾平野の内陸部では非常に弱くなっている。風速は12時がもっとも弱く、18時がもっとも強くなっている。



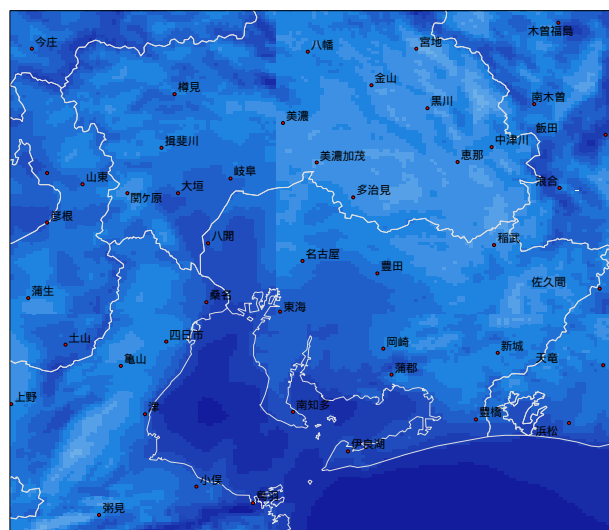
( 0時 地上 50m )



( 6時 地上 50m )



( 12時 地上 50m )



( 18時 地上 50m )

凡例

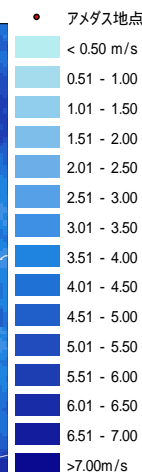
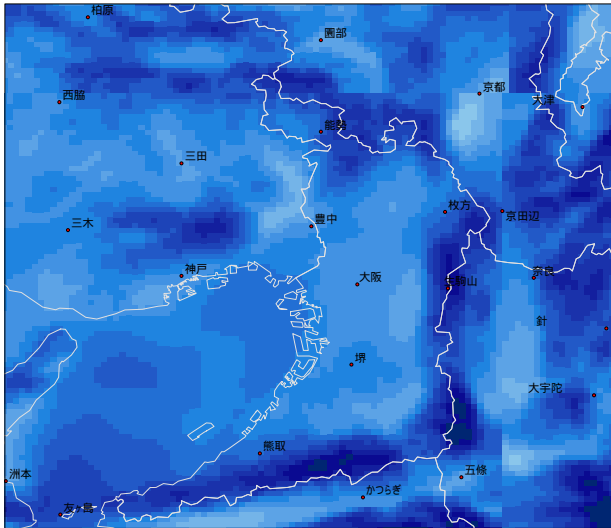
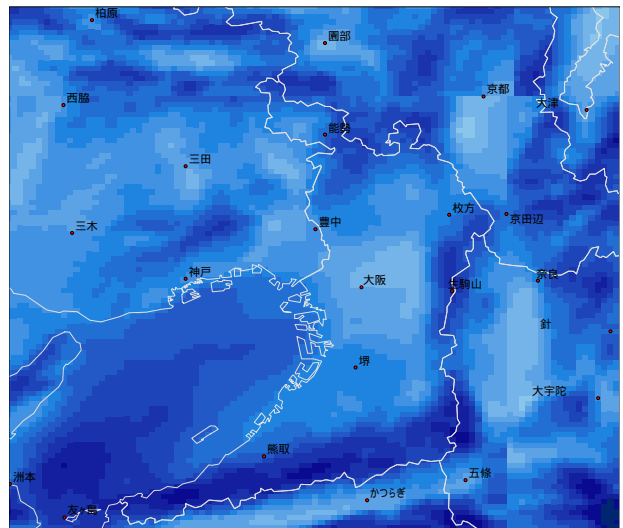


図 2 - 20(2) 中部地方の風向・風速分布

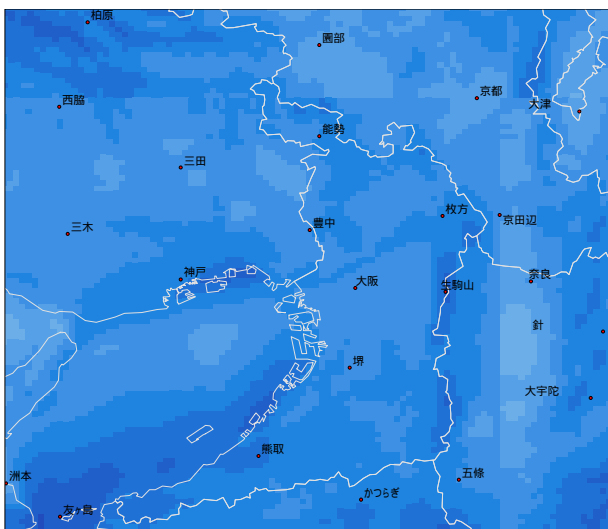
近畿地方では、0時と6時は南風が主であり、12時には西風、18時には南西風が主となっている。風速は山地部で強くなっており、大阪平野東部、京都盆地、奈良盆地などでは非常に弱くなっている。時刻別でみると12時がもっとも弱く、18時がもっとも強くなっている。



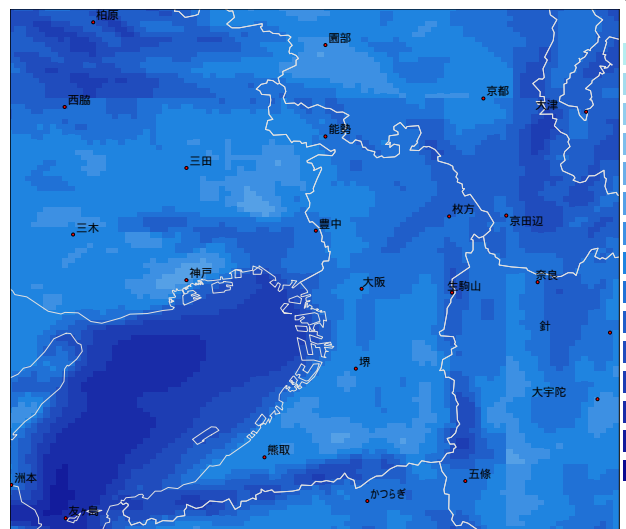
(0時 地上50m)



(6時 地上50m)



(12時 地上50m)



(18時 地上50m)

凡例

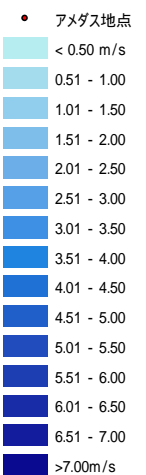


図2 - 20(3) 近畿地方の風向・風速分布

#### 4) 都市の熱環境特性のまとめ

気温データの整理によって、夏季においては北海道、東北を除く全ての都市で全国的に気温が上昇傾向にあることが明らかになった。また、気温の上昇傾向は図2-16に示すように、沿岸部に位置する都市は最低気温が上昇し気温の日較差が減少する傾向がみられ、内陸部に位置する都市では最高気温が上昇し気温の日較差が拡大する傾向がみられるなど、気温上昇傾向に地域性があることが示唆された。

一方、気温上昇の要因と考えられる土地被覆の人工化は、大都市では1970年代以前に既に進行しており、中規模の都市では1980年代以降の人工化が進行していることが示された。また、気温上昇を抑制する要因と考えられる風環境については、沿岸部では比較的風が強く、内陸部では風が弱い状況が示された。

これらの状況から、沿岸部と内陸部では気温上昇の傾向に違いがあることが示され、都市が立地する地理的条件が気温上昇傾向に関係があることが示唆された。また、ほとんどの大都市は沿岸部に位置するため、都市規模が気温上昇傾向に関与することも考えられる。